

パンのある幸せな食卓を 53

小さな一文字での大きな発見

文 木村安兵衛

Text by Yasuhide Kimura

近

代日本を牽引した思想家であり、教育者であった福澤諭吉。慶應義塾（現慶應義塾大学はじめ系列校）を創立し、『脱亜論』『学問のすずめ』『福翁自伝』などを執筆し、保険という概念を日本に持ち込むなど、その功績には枚挙にいとまがありません。一万円札の人物としても有名であります。

そんな福澤は男尊女卑の時代に日本でジェンダーフリーを唱えた最初の人物であることはあまり知られていないようです。

先日福澤の家族論に触れ、その一端を垣間見る機会がありました。その中で福澤は夫婦で大切なことは「愛情・尊敬・恕」であると説いています。夫婦間で愛情があるということは、大切で間違いない根幹であると思いますが、動物でも同じであるとも説いています。人間ならではの夫婦関係には尊敬と恕が不可欠であるようです。

愛情、尊敬という言葉は普段から馴染みがあるので理解しやすいのですが、「恕」という文字は私の日常では触れる機会がないだけでなく、「怨」とデザインが似ているせいか、何だかおどろおどろしいイメージがしてきます。

「恕」という文字は「如」と「心」が合わさってできた字である。すなわち「心の

如く」であると解釈することができません。つまり自分にとってやられたら嫌なことは相手にはしない、ということであると福澤は説いています。そして夫婦間の役目などを男と女を入れ替えてみればあるべき姿が見えてくるとも言っています。

ここから福澤は夫婦論、家庭論に発展していくのです。

そこで私はハッとしましたのです。福澤は否定形から「恕」という文字にアプローチしましたが、これを能動的なアプローチをする、それはホスピタリティという解釈にたどり着くのではないのでしょうか。

東京オリンピックのプレゼンテーションの場で「おもて・な・し」という名言が生まれましたが、私は昔からホスピタリティという言葉の和訳におもてなしを使うことに抵抗を感じていました。「自分の家にお客様をお招きした時のようにおもてなさい」。このワードがしつくり来ないのです。そもそも気を使わなければならぬ人は自宅などには呼ばずに、どこかの店で会うようにしていました。友を招いた時は「冷蔵庫にビールとかあるから勝手に飲んで」とやっていました。

この「自分のして欲しいサービスを手相手してあげる」ということを一文字にした「恕」という言葉こそがホスピタリティの和訳にぴったりなのではないでしょうか。

パン屋という商売を第二次産業の延長線に置くのではなく、パンという物をフックにしたホスピタリティ産業にしようとするほど、パンにはドキッとしてしまうほどの大きな発見をした小さな一文字でした。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA（米国食品医薬品局）研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブランジェリーエリックカイザージャパンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2020年現在41店舗を数える。

